



望

と

勇

令和7年9月18日

No.25

文責 田中 誠

如実にわかる

暮らしの中で、「それってこういうことか!」や「だから〇〇なんだ!」と、気持ちよく納得することはないでしょうか。先日、浅間山の噴火の歴史に触れる機会があり、2万年以上前の噴火が、佐久市や小諸市の地形に大きく影響していることを知りました。千曲川沿岸の切り立った地形の理由が分かった気がして、「ああそういうことだったのか」と思わずつぶやいてしまいました。これまで何気ない景色として目に入っていた景色でしたが、今度からは違う見方ができそうです。もし、実際の地形を見ずに、歴史だけを知ったとしたらここまでの納得は得られなかったように思います。「如実にわかる」瞬間でした。

この言葉は、「実感を伴った深い理解」とも言い換えることができるでしょうか。今回の上記のエピソードはごく浅いものですが、子どもたちは日々こういう経験をしていることと思います。学校での出来事もそうであってほしいものです。できればどの授業でも「如実にわかる」ことを実現させたいものですが、それはなかなか難しく……。それでも目指していきたい姿です。

かつて、中学校2年生の国語の教科書に『わかるということ』という随筆が掲載されていました。（同年代の皆様、記憶にございますでしょうか？）筆者は、心理学者の佐伯^{ゆたか} 胖 先生。信濃教育会教育研究所の所長も務められた、長野県にもゆかりのある先生です。そこには、子どもたちが算数の授業において「整数÷小数」の意味を如実にわかっていく様が述べられていました。心理学者の視点で考察されているものの、中学生にも大変分かりやすく、（当時の教科書の内容はほとんど記憶にないのですが）この短い随筆は心に深く残っています。実は、最近改めて読む機会を得ました。教員になった今では、この授業がもつ意味が、自分ごととして迫ってきます。

本校で「鎌倉時代の衰退」についての授業を参観しました。元寇によって窮乏した御家人の借金を帳消しにする徳政令。教科書の記述だけではなかなか理解が難しいところです。授業では、現代の状況に置き換えてロールプレイをしていました。徳政令によって借金を踏み倒された人々の気持ちに近づくためです。「だから信用を失ったのか・・・!」そうつぶやく6年生の姿に、『わかるということ』の具現を見た気がしました。